は猫である。名前はまだ無い。
　どこで生れたかとんとがつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々をえてて食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼のに載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というもののであろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるでだ。その猫にもだいぶったがこんなには一度もわした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうとを吹く。どうもせぽくて実に弱った。これが人間の飲むというものである事はようやくこの頃知った。